

## 表紙裏の散歩

今西, 祐一郎

<https://doi.org/10.15017/4742074>

---

出版情報 : 雅俗. 17, pp.145-153, 2018-07-17. 雅俗の会  
バージョン :  
権利関係 :

## 表紙裏の散歩

今西 祐一郎

渡辺守邦氏の『表紙裏の書誌学』（二〇一二年一月、笠間書院刊）によって、近世初期刊本の「表紙裏」という場所が注目を浴びるようになった。「表紙裏」に関連しては、すでに『日本古典籍書誌学辞典』に「表紙裏張り」という立項があり、

書物の表紙は、本文共紙表紙や切付表紙などを除いて、通例厚みを持たせるために、表紙裏に厚手の芯紙を張るか、本文料紙と同程度の紙を一枚ないし二、三枚重ね合わせる。時代や写本、板本で事情は異なるが、古活字版の初期の場合、この裏張りに古活字版の刷り破れや本屋の受け取りや注文の反古紙が張り込まれ、印刷事情を推測する手がかりとなる。（岡雅彦氏執筆）

との解説がある。だが、渡辺氏には、前掲書に先だつこと二十五年前に『古活字版傳説』（昭和六二年一月、青裳堂書店）の著があり、「板本零葉の種々相―表紙裏の反古・その一」、「寛永時代の出版事情同・その二」などの目次から知られるとおり、はやくより和本の「表紙裏の反古」に注目し、それを江戸時代初期板本の書誌・出版研究の資料として扱おうという、ユニークで意欲的な見解が展開されている

た。それをさらに発展させ写真撮影による表紙裏反古の現状の正確な記述をはじめ、精緻極まる研究方法を確立し、ワークシヨップの成果として公開したのが『表紙裏の書誌学』であった。

\*

手許の和本の表紙裏から時に面白そうな反古を見つけた際、何となく捨てられず残っていた筆者は、渡辺氏の新著に感銘を受け、本稿執筆にあたって一旦は「表紙裏の書誌学」統紹」という題を頭に浮かべた。「統紹（ぞくちよう）」とは、本来は貂の尾で飾るべき冠に犬の尻尾を代用したという「狗尾統紹」の故事にもとづく語、転じて謙辞として用いられるようになった言葉である。けれども文章のタイトルに用いる「謙辞」とは、自らに自信があるからこそ使用できるものであることを考えると、「表紙裏」に関して筆者ごとき素人が「統紹」を称するのはおこがましいので、気ままな無責任な「散歩」と称することにした。

さて、一誠堂や思文閣のような、本の姿も価格も一流の古書店から入手する本には、表紙裏が露出しているようなケースはほとんどないが、毎週末、東京古書会館で開かれる古書即売会、その中でも比較的古典籍の出品が多い「趣味展」、「和洋会」、「書窓展」などで数百円、



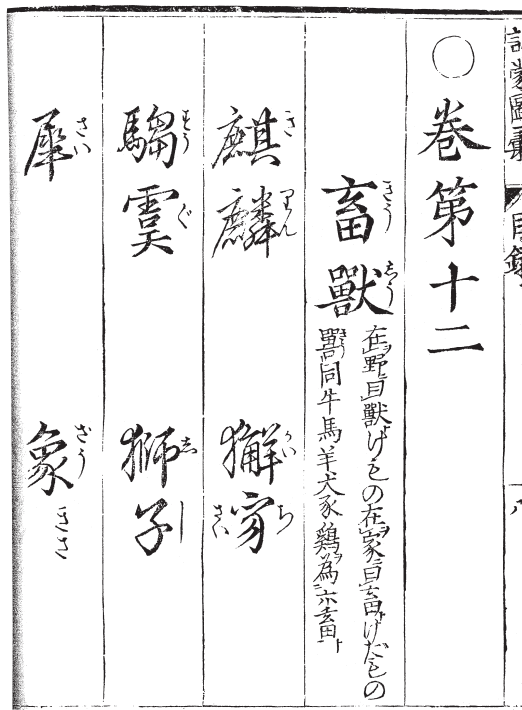


図3 『訓蒙図彙』寛文6年刊(『近世文学資料類従』による)

図4はかろうじて柱刻が残り、『採梔集覽』と読める。これは寛文十二年刊の弓の本で、『国書総目録』によれば「国会、内閣、神宮、旧彰考」に所在のよし、「古典籍総合目録データベース」では、書陵部蔵の元禄十六年刊の画像を見る事ができるが、内容は同じながら明らかに図3とは版面が異なる。してみればこれはそれに先立つ寛文十二年刊本の一葉であろう。

このように、ちよつと面白そうな表紙裏の反古を取っていただいたものの、無精な筆者はその反古がどのような本の表紙裏に使用されたものであったかをメモする事もしなかつたので、その出自は今となっては全く不明である。

板本の零葉だけでなく、写本の反古や文書が出てくることも勿論

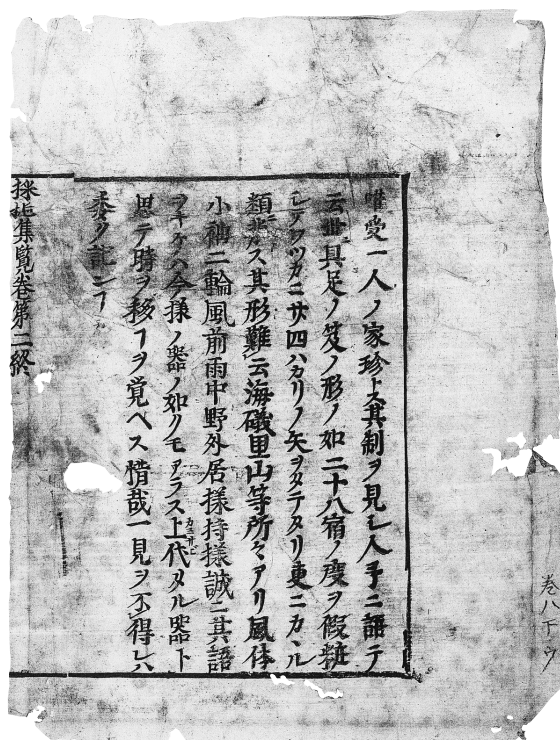


図4 『採梔集覽』

ある。次に掲げるのは、幸いに巻の初葉で書名が知られる『三猿物語』の断簡三葉のうちの一である。『国書総目録』に記載はなく、もとより筆者には聞いたこともない書名であったが、「古典籍総合目録データベース」に前編五冊、後編六冊の京大大惣本のみが載る。表紙裏の『三猿物語』と大惣本のそれは同一書であろうか(誰か調べて下さい)。もし同一であったとすれば、このような現時点での天下の孤本の零葉がどのような本の表紙裏に使用されていたのか、気になることである。だがこれまた今となってはどんな本に使用されていたのか不明、それを記し留めておかなかつた筆者の不見識を恥じるばかりである。



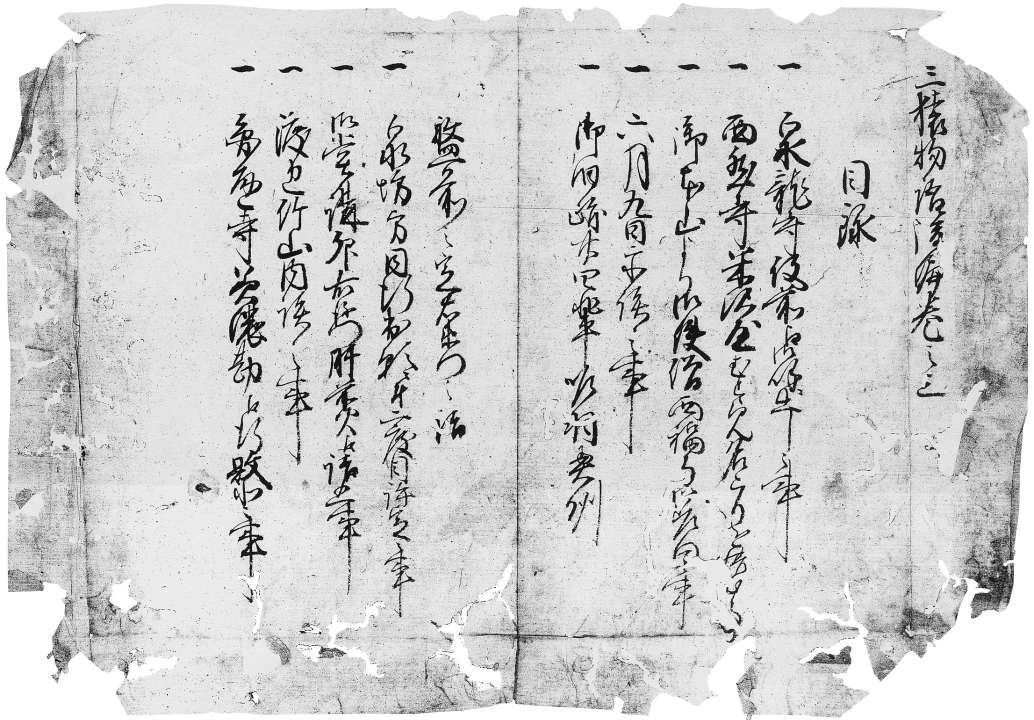


図5 『三猿物語』

\*

さて本稿は、昨年入手した板本『仙覚萬葉集抄』（題簽。内題は『萬葉集註釈』二十冊（図6）から見いだされた表紙裏反古についてである。夙に「国文註釈全書」や「仙覺全集」に『萬葉集註釈』の名で収められている、鎌倉時代の学僧仙覺の手になるこの書の万葉集研究史上の価値については改めて述べるまでもないが、その板本の評価は芳しくない。『校本萬葉集』首巻「萬葉集註釋書の研究」では、

而して仙覺抄の木版本は二十冊で、題簽に仙覺萬葉集抄とある平仮名本であるが、誤字も極めて多い悪本である。

と、「悪本」の汚名を蒙った気の毒な刊本である。刊記はなく出版時期、書肆ともに不明、『日本古典文学大辞典』（岩波書店刊）によれば、

江戸前期刊本は、木村正辞は宝永（一七〇四—一七一）ころの刊とする（『国文註釈全書』が、契沖が『万葉集代匠記』初稿清書本―精撰本著間に加えた訂正書入本が賀茂別雷神社に、転写本が彰考館にあるので、元禄元年（一六八八）頃よりも前になる。この刊本はもとの平仮名を片仮名に変えたものであるが、誤りが多い。

と記されている。なお、右記解説の「この刊本はもとの平仮名を片仮名に変えたものであるが」という記述は不注意による誤記であろう。仙覺の『万葉集註釈』の最古本、仁和寺藏本（重要文化財、京都大学国語国文叢書 別巻第二に影印）は片仮名本であり、板本は本来の片

仮名本を平仮名に変えたテキストである（図6）。

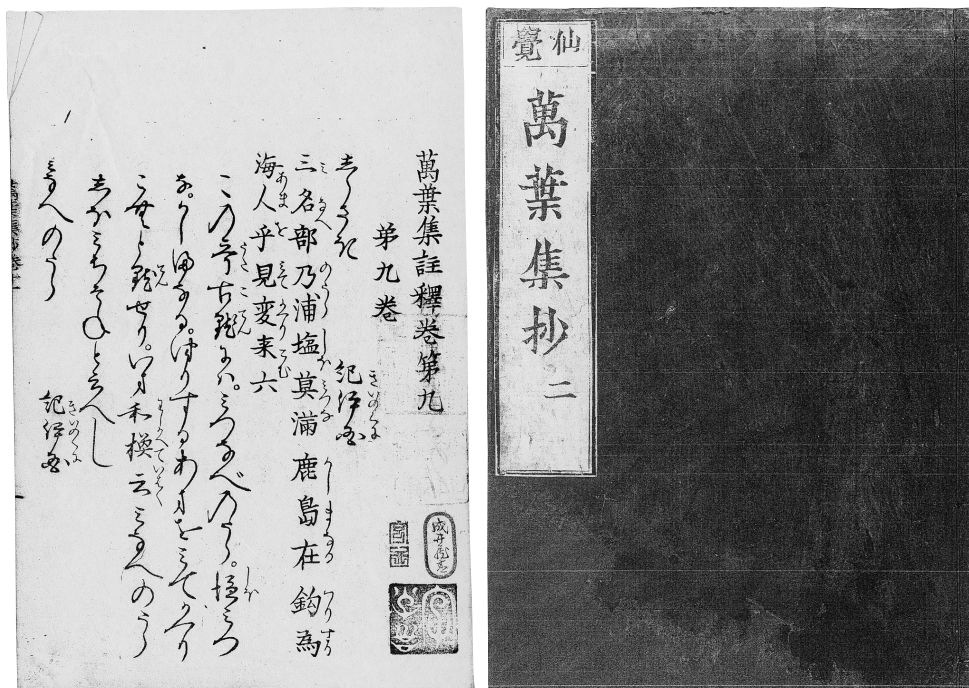


図6 板本『仙覚萬葉集抄』

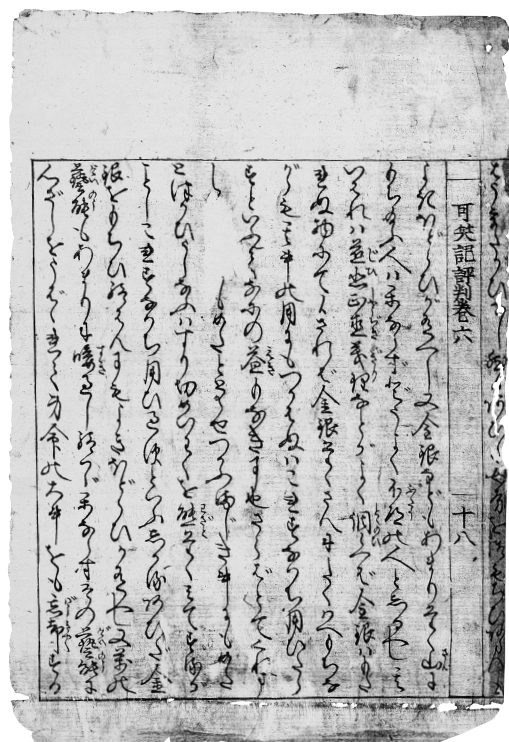


図7 『可笑記評判』

その板本『仙覚萬葉集抄』二十冊の各冊の表紙裏から、浅井了意の『東海道名所記』（半葉四枚）、『可笑記評判』（同七枚）、『浮世物語』（同九枚）、そして『国書総目録』には著者を記さないものの、北条秀雄氏によつて了意の著作と指摘される『本朝武家根元』（同四枚）、中江藤樹の『為人抄』（同十二枚）、都合五点の書物の反古が出現した。

そのうち、柱刻によつて筆者にもすぐ書名がわかつたのは『可笑記評判』、『浮世物語』、『為人抄』の三点。

『東海道名所記』は、柱刻はあるものの、それは「道行」となつており（図10）、仮名草子に不案内な筆者は、はじめ、それが『東海道名所記』の柱刻であることがわからず、中身を読んで見当をつけ、『名所記』であることがわかつた次第。その分野の研究者には必要のないこ



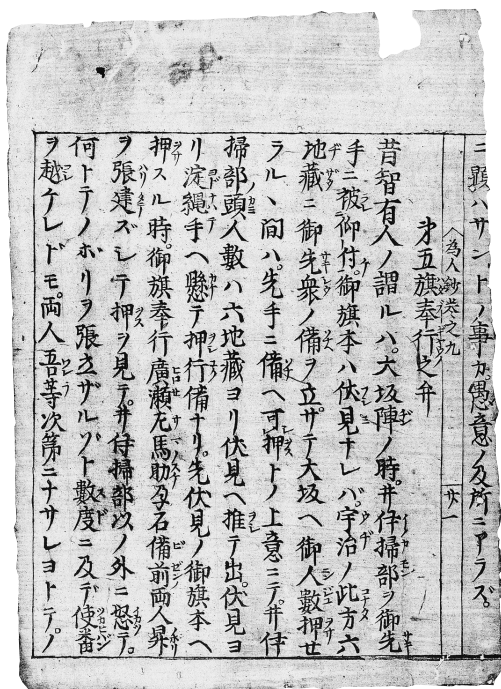


図9 『為人抄』

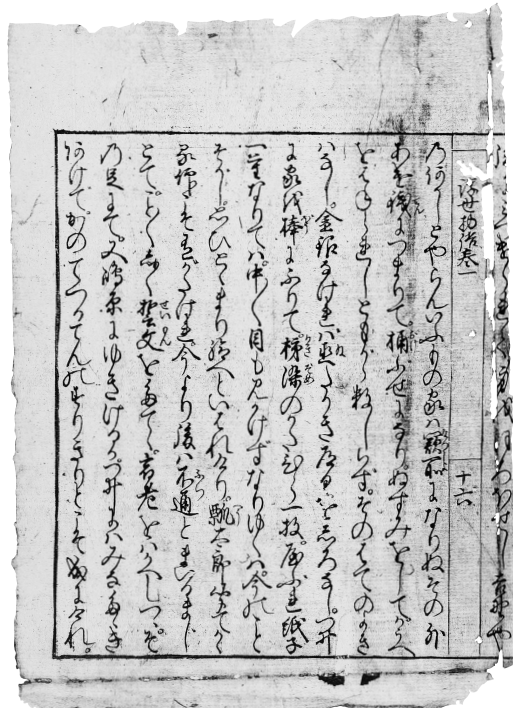


図8 『浮世物語』

となのかもされないが、たまたま手許にあった「日本古典全書」の『仮名草子集』の解説には、柱刻への言及がなかったのである。

ところで、『浮世物語』は了意の著作で書名を筆者も知っていないから、よくある本かと思っていたら、案外稀覯の本らしく、日本古典籍総合目録データベースによれば、五巻揃いは京大・広島大・横山重・日比谷・中京大・明星大くらいで、国文学研究資料館には高価な零葉集に貼られた二葉だけという有様だった。となれば、『仙覚萬葉集抄』の表紙裏に潜んでいた五葉の断簡もまんざら捨てたものではない、ということになるか（同じ事は『東海道名所記』の零葉にもあてはまる）。

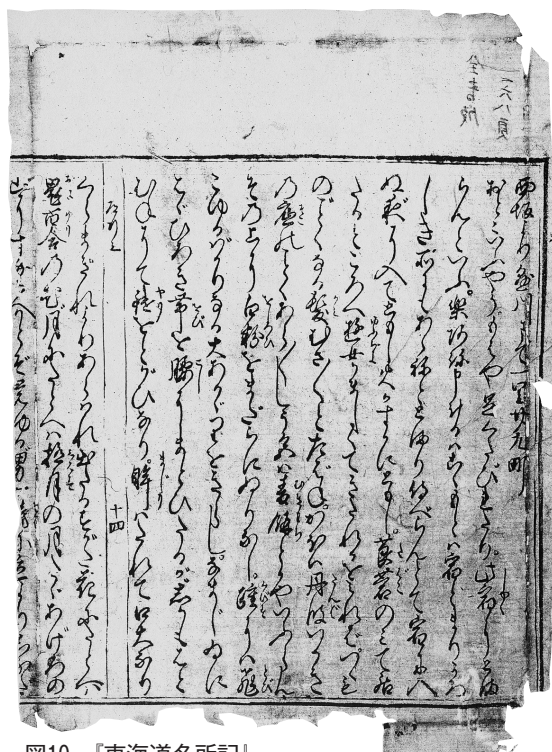


図10 『東海道名所記』

\*

さらに了意作と推定される『本朝武家根元』は、はじめは柱刻を発見できず、零葉の一枚に「第五攻城の弁」とあるので(図11)、軍書であるとの見当は付いた。しかし筆者がかるうじて知っている『甲陽軍鑑』でも『古今軍林一徳抄』でもなく、途方に暮れたが、四枚の零葉をあらためて見直したところ、その一枚に、紺表紙の残欠に覆われたわずか六ミリの折り込みがある。それを裏から見ると幸いなことにそれは柱刻部分で書名らしき文字がうっすら透けて見えるではないか。早速水で湿し紺紙を慎重に矧ぎ取ったところ、そこから「武家根元八」の柱刻を確認することができた(図12)。

この書も稀観の刊本と言うべく、現存は『総目録』では明暦三年版

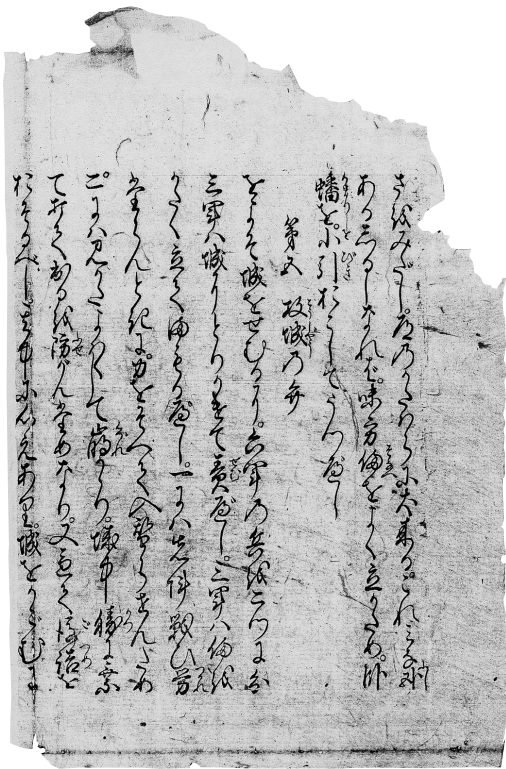


図11 『本朝武家根元』

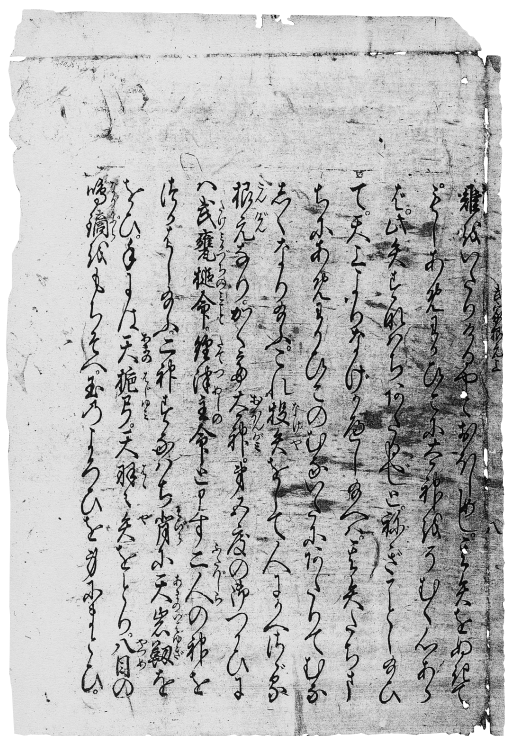


図12 『本朝武家根元』

が国会、内閣、東博(中巻欠二冊)、旧下郷、刊年不明が教大、東北狩野、吉田幸一のみ、「日本古典籍総合目録データベース」では高知城歴史博山内文庫の一本が追加され、画像も備わる。北条秀雄氏は寛文十年以後の書籍目録が作者を松雲または了意としていることなどを根拠に浅井了意の著作としている(『改訂増補浅井了意』)。

とすると、『仙覚萬葉集抄』の表紙裏には、中江藤樹の『為人抄』以外は、浅井了意の刊本四点の反古が用いられていることになる。このような表紙裏における了意本の集中は何を意味するのであろうか。

\*

以上のような表紙裏の反古が見いだされた『仙覚萬葉集抄』は、先にも記したように刊記がなく出版時期は、江戸前期という以外は不明



である。『日本古典文学大辞典』では、元禄元年（一六八八）以前とされるにとどまるが、今回紹介した表紙裏反古との関係でもう少しその時期を絞ることはできないか。

了意の『武家根元』は明暦三年、『東海道名所記』は万治年間、『可笑記評判』は万治三年、『浮世物語』は寛文初年、中江藤樹の『為人抄』は寛文二年の刊である。それらが表紙裏反古として用られているということは、『仙覚萬葉集抄』の刊年推測に何ほどの示唆を与えることにならないだろうか。

江戸初期刊本の表紙裏の反古は、製本され流通した書物がその後解体され表紙の補強に使用されたというのではなく、刷り損じ、刷り余り等本屋の事情で破棄されたものだという。『萬葉集抄』にもそのことを窺わせる反古は少なくない。図13は、手元の狂いからか文字が不鮮明であるのみならず、どういふわけか版面に大きな空白のある『浮世物語』巻三の第九話「鷹の爪を引闕たる事」の冒頭部分の刷り損じである。

このような反古の処理、利用がどのような仕組みで行われていたかは寡聞にして知らないが、本屋で出た反古が同じ本屋で再利用されるとすれば、それらを表紙裏に使用した本は、表紙裏反古の印刷時点から元禄元年までは二〇年以上隔たっている。となると『萬葉集抄』の刊年は『日本古典文学大辞典』が推定した「元禄元年以前」よりは、もう少し遡らせて寛文年間くらいを想定することも出来るのではないか。また、同じ本の表紙裏に了意刊本の刷り反古が四点もまともに見いだされるというのは、たんなる偶然であろうか。もし偶然でない

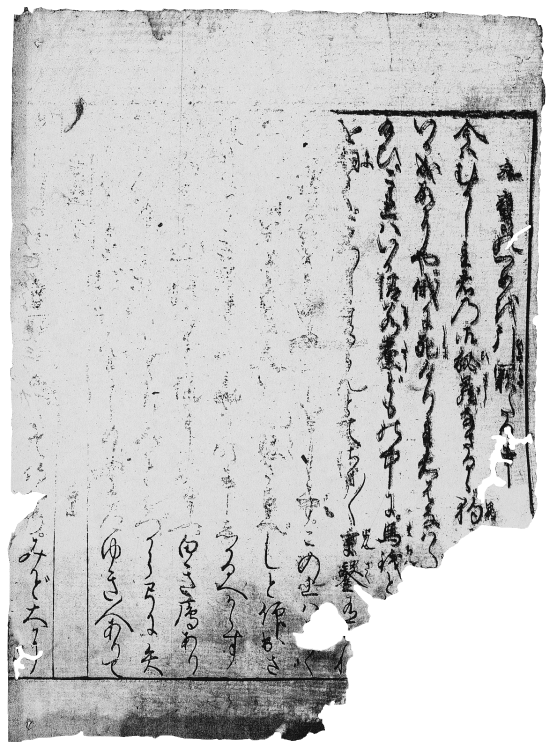


図13 『浮世物語』巻三第九話

すれば、『仙覚萬葉集抄』表紙裏に使用された了意刊本四点は、最初の出版書肆ではないとしても、ある時点で書肆を同じくする出版であったということも考えられるのではないか。そして『仙覚萬葉集抄』も、それらの了意本と同じ書肆から出版されたのだと。

しかし、『仙覚萬葉集抄』のすべての板本が、反古張り表紙本であるというわけではない。物ぐさな筆者は他の本を見て回ったことはないが、過日、神作研一氏の高配で国文学研究資料館蔵の同書を見る機会があった。それは初巻を欠き、所々虫喰いに犯された十九冊であったが、筆者手許の本に比して墨付き鮮明、紙質も腰のしつかりした良本であり、表紙裏を覗いてみたところ、そのどの冊にも刷り反古を使用した表紙は見られなかった。

同じ本でも、表紙裏に刷り反古を利用した本と、そうでない普通の表紙本があるということになれば、刷り反古使用表紙の本はどういう場合に作られたのであろうか。

反古を使わない上製本と刷り反古再利用の並製本といった作り分けがあったとまでは言えないにしても、通常の表紙をもつ本と刷り反古使用表紙本との間には、何らかの製作事情の違い、ひいては何ほどかの商品価値の差があったのではあるまいか。たとえば初印本と、急遽その不足を補うための後印本の違いとか……。

以上、散歩の道すがら思いついたことを綴ってみた。執筆に際し書誌に不案内な筆者に助言を惜しまれなかつた神作研一氏に感謝する。

(了)